

## 鵜殿の歴史とヨシ原

### 1. 歴史

三川合流（木津川、宇治川、桂川）後の淀川の流れが山崎から流れる島本町の現平坦部は以前は奥深い入り江で港津として賑わい、水無瀬離宮や東大寺領荘園が設けられた。その水が上牧山の鼻、対岸の樟葉の間の浅瀬を越えるように流れ落ちる所が鵜殿である。鮎が海から上ってきて浅瀬を越える、それを鵜飼舟が漕ぎ出して獲る、地名の由来（\*）である。平安時代の摂関政治の時代、鵜殿のすぐ上流沿岸に貴族の放牧場があって、今も上牧という地名が残る。鵜殿は岬のような地で浅瀬の川に出っ張っていたから水上交通を監視する場所でもあった。紀貫之の「土佐日記」（935年）に、「こよい うどの といふところにとまる」とあり、そういう施設があったのだろうし、それが鵜殿かもしれない。

——\*古事記（712年）の崇神天皇の段の記載

崇神10年（BC88年）反乱軍は朝廷軍に敗れ流れる死体が鵜のようだったので鵜河と呼ばれた。——これに因んで鵜殿の名がつけられた。——

鵜殿あたりは京都の烏丸家（からすまる）の領地で、明治維新までそうだった。葦は烏丸家のものとなり、領民は葦刈りの仕事にも従事したと考えられる。江戸時代 淀川は幕府直営の舟交河川となり沿岸領民が葦刈りに入ることさえ禁じられたが、上牧、鵜殿の葦だけは認められた。

明治以降 沿岸農民に入会権が発生したのもこの史実による。よしずを生産する産業は製品を宇治茶園、北摂山間部の寒天やに送っていた。鵜殿のヨシ原を取り囲むようにあった村々にはそれぞれに渡し場（浜）があって対岸の樟葉、牧野に舟が行き来し、倉も建ち料理屋もあるなど賑わっていたが、明治10年に東海道線が開通し陸の交通網が発達するに従い廃れていった。

### 2. ヨシ原の今と昔（明治・大正・昭和 道鵜の古老は語る）

#### ①ヨシ刈り

——鵜殿のヨシは享保元年（1766年）すでに梶原家三代目によって御所の雅楽器の歌口として献上し、以来鵜殿ヨシ原は免租の恩典に浴し特別の庇護を受けてきた。——ヨシ刈りの権利は、それまでの大庄屋梶原家から大正

5年の大洪水をきっかけに大正12, 13年頃(1923, 24年)救済策として村へ移管された。

ヨシの収穫量は昭和初期で一万束以上(村人が一日中毎日ヨシ刈りしても40日かかった。)、昭和24, 5年ごろがピーク。

昭和28年ごろから出来が悪くなり、現在では(昭和56年)村全体で千束ぐらゐに落ち込む。原因は淀川上流に次々ダムが建設され

流水が少なくなり、ヨシ原が冠水しなくなったからだと思います。

昭和30年頃(1955年)までは、毎年5, 6月頃になると、2, 3日ヨシ原が水に浸かっていたから、雑草はあまり生えませんでした。冠水しなくなると、ヨシの育ちが悪くなるばかりでなく、ツル草、セイタカアワダチソウがすごい勢いで繁茂し始めたのです。

## ②ヨシ焼き

ヨシ原ではヨシ(よしず、すだれ、箆簀用、寒天ず、宇治茶畑の日おおい)ばかりでなく、カヤ(植物名オギ、燃料、農家の屋根葺き用——1軒で1万束消費、)も刈り、これら有用な収穫物は残さずきれいに刈っていたから野焼きも必要なかった。

燃料にプロパンガスが入ってくるようになると、屋根も瓦に代わってカヤも刈り取られなくなり、一方で雑草も増えつづくものですから、昭和27, 8年頃(1952, 53年)ヨシ焼きを始めました。

したがって昔から伝統的に行われてきたものではありません。

ところが昭和31年ヨシ焼き最中に同じ村の農家の屋根に飛火して全焼する事故が起き、当時はカヤ葺屋根の農家も残っており、ヨシ焼きを中止した。

その後年々セイタカアワダチソウが特に目立つようになり、ヨシ刈りの際残った前年のヨシは堅くなりすぎて刈るのに往生するので、

昭和50年(1975年)再開されました。

出典資料：高槻公害問題研究会 1981年 特集号1

自然観察会ニュース「鶺鴒のヨシ原」から抜粋、要約